イタリアの日本資料図書館における活動・実態調査報告

江 上 敏 哲

抄録：2005年12月，イタリアのナポリ・ローマ・ヴェネツィアの日本資料図書館を訪問し，各館における実態，特に，活動・運営，蔵書，日本資料・日本情報の提供・入手，目録等について調査した。イタリアにおける日本語学習者は増加傾向にあるが，蔵書の多い図書館は少なく，ほとんどの図書館で東アジア・東洋等と同組織である。日本語を理解する司書も少ない。日本からの図書館サービス・情報発信の改善として，書誌・目録データベースにおけるローマ字併記の整備，ILL受付体制の整備と説明の強化等が考えられる。

キーワード：日本資料図書館，イタリアにおける日本研究，ナポリ東洋大学アジア研究学科図書館，ローマ国立中央図書館東洋コレクション，国際交流基金ローマ日本文化会館図書館，ローマ・ラ・サピエンツァ大学文学部東洋学科図書館，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学外国語・外国文学部東アジア学科図書館

はじめに

本稿は，イタリアの日本資料図書館における活動・実態についての訪問・調査報告である。筆者は2004年9月にイギリス・アイルランド・オランダの日本資料図書館について調査した[1)]。加えて本稿では，「非英語圏」「日本語を理解するスタッフがいない」等の条件下における日本資料図書館の活動について調査を行なうことで，先の調査の補完を試みるものである。

期間は2005年12月12日から同15日まで。訪問先は，ナポリ東洋大学アジア研究学科図書館（ナポリ），ローマ国立中央図書館東洋コレクション，国際交流基金ローマ日本文化会館図書館，ローマ・ラ・サピエンツァ大学文学部東洋学科図書館（以上ローマ），ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学外国語・外国文学部東アジア学科図書館（ヴェネツィア）である。訪問した各図書館の有する特徴・特性は様々であるが，総じて以下のような内容について調査を行なった。

- 図書館活動・運営全般
- 日本資料・日本情報の提供（蔵書，整理・配架，利用状況等）
- 日本資料・日本情報の入手
- 目録システムとその提供

調査内容は特に断りのない限り2005年12月現在のもの，記載URL（本文・注・参考文献とも）はすべて2006年3月26日確認のものである。なお，本稿で言う「日本資料」は「日本語資料」及び「非日本語による日本関連資料・日本研究用資料」を指す。

1．概観

1.1 イタリアにおける日本研究・日本語教育

イタリアにおける近代以降の日本研究・日本語教育は，1860年代，日本の開国後まもなく始まった。フィレンツェ，ヴェネツィア，ローマ，ナポリの各大学において，1860-1870年代の間に相次いで日本語講座や日本研究部門が開設されている。

1933年には現Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente（IsIAO，アフリカ東洋研究所）の前身であるIstituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente（IsMEO，中亜極東協会）[2)]が設立。第二次世界大戦を経て，1962年にローマ日本文化会館，1973年にはAssociazione Italiana per gli Studi Giapponesi（AISTUGIA，伊日研究学会）[3)]が設立される。

人文科学分野や伝統文化への興味関心もさることながら，1980年代からは日本の経済的発展を背景として社会科学分野への，2000年代に入ってからはマンガ・アニメ等のポップカルチャーへの興味関心も高まっている。国際交流基金の調査[4)]によれば，イタリアにおける日本語学習者の数は，2000年で約3,500人だったのが，2004年には約6,500人と増加傾向にある。2004年現在で日本語教育が行なわれている大学が19大学，日本研究で学士取得できる大学は5大学[5)]。とりわけ，今回の訪問先であったナポリ東洋大学，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学，ローマ・ラ・サピエンツァ大学に，日本語を学ぶ学生が多い。

1.2 イタリアの図書館ネットワーク

イタリアにおける代表的な図書館ネットワークシステムとして，SBNとACNPについて触れておく。

Servizio Bibliotecario Nazionale（SBN）[6)]は，イタリアにおける全国規模の図書館総合目録ネットワ

ークシステムである。Istituto Centrale per il Catalogo Unico delle Biblioteche Italiane e per le Informazioni Bibliografiche（ICCU）[7] の管理・調整による。国内の各図書館機構を，総合目録の提供というかたちでとりまとめようとする活動である。大学・国立・公共ほか各種図書館が参加し，総合目録を形成。開始は1992年。参加館は約2,700館（2006年5月現在）。但し，後に述べる通り，今回の訪問先のうちナポリ東洋大学，国際交流基金ローマ日本文化会館図書館，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学はこの総合目録に参加しておらず，独自にOPACを構築・提供している。

Archivio Collettivo Nazionale dei Periodici（ACNP）[8] は，Catalogo Italiano dei Periodiciの別称の通り，国内所蔵逐次刊行物の総合目録ネットワークである。ボローニャ大学のCentro Inter-Bibliotecario（CIB）[9] が管理・調整を行なう。開始は1988年。参加館は約2,500館（2006年5月現在）。

1.3 イタリアの日本資料図書館

日本資料を所蔵する図書館・文庫等としては，今回の訪問先以外に，前述のアフリカ東洋研究所，ウルバニアーナ教皇大学，ボローニャ極東美術研究所，サレジオ大学マレガ文庫等があり，かつヴァチカン市国内のヴァチカン図書館がある。

ローマ日本文化会館図書館の加治氏の調査[10] によれば，イタリア国内で1万冊以上の蔵書を持つ日本資料図書館は，ナポリ東洋大学アジア研究学科図書館，国際交流基金ローマ日本文化会館図書館，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学外国語・外国文学部東アジア学科図書館の3館。また，ローマ日本文化会館図書館以外は，東アジア・東洋等の組織の一部に組み込まれている。日本語を充分に理解する司書もほとんどおらず，今回の訪問先でも，大学であれば日本語・日本学科の教員に頼っている状況であった。

2．ナポリ東洋大学アジア研究学科図書館（ナポリ）

Biblioteca del Dipartimento di Studi Asiatici, Università degli Studi di Napoli “L’ Orientale”
http://www.iuo.it/dipsa-new/biblioteca/pagina-biblioteca.htm

2.1 ナポリ東洋大学

ナポリはイタリア南部の港湾都市であり，ローマから鉄道で約2時間。街の歴史は古代ギリシャ時代まで遡る。

ナポリ東洋大学[11] は，18世紀前半に開講されたCollegio dei Cinesiを前身とする。アジア・オリエント地域の語学・研究に重点を置いた大学としての歴史を持ち，1903年に日本分野の課程が設けられている。現在は文学・哲学，外国語・外国文学，政治学，アラブ・イスラム・地中海学の4学部からなる。

ナポリ東洋大学があるのは，スパッカ・ナポリと呼ばれる下町地域。細い路地に商店が並び，平日の昼間でも市民や観光客等，多くの人々が行き来している。アジア研究学科図書館はこのスパッカ・ナポリのほぼ中心に位置し，大学本部にほど近い別の建物の中にある。

2.2 アジア研究学科図書館

現在のアジア研究学科図書館が生まれたのは1984年。それまで別の図書室であったアラブ・イスラム，考古学，インド，イラン，セム・ユダヤ，中国，トルコ，日本の各分野が統合し，現在の図書館となった（のちに地理学が加入）。

閲覧室をはじめ各部屋は17世紀の建物をそのまま使用している。2階から4階までの3フロアにわかれており，4階にカウンター，カード目録・OPAC端末，閲覧室，レファレンス資料，カレント雑誌，オフィス等。4階閲覧室は窓を閉めているためか，スパッカ・ナポリの中心地であるにもかかわらず喧騒はまったく気にならない。3階に，古い年代の図書を収めた書庫（手動集密書架）。2階に，新しい年代の図書。2階・3階は換気のために窓を開けているせいか，街の喧騒が直接響いてくる。

8～9人いる図書館スタッフのうちに，日本語を解する人はいない。アラビア語・ペルシャ語をやや理解する人がいる他には，ここで取り扱っている言語を理解できるスタッフはいないとのことであった。

2.3 蔵書と配架

全館の蔵書は，図書約21万冊（うち原語約4割），雑誌約2,000タイトル（カレント約1,300タイトル）。他に写本約150点，マイクロ・視聴覚資料約500点等。

日本資料は約18,000冊（うち図書約12,000冊）であり，その約6割が日本語である。ちなみに，中国資料はほぼ同数，韓国資料はそれほど多くないとのこと。年間受入図書冊数は約600冊，カレント雑誌は約200タイトル。年間資料購入額は約14,000ユーロ。

メインとなるのは言語・文学等の人文科学分野だが，それ以外にもあらゆる分野の日本資料をここで所蔵している。後述の分類用サブジェクトコードで

は，美術・建築等の芸術分野のほか，法律，経済，教育，社会学等を用意。自然科学分野の図書も，例えば日本の数学，地震に関する図書等が所蔵されている。

分類・請求記号には，「エリアコード」＋「サブジェクトコード」の順による独自の分類体系を使用している。エリアコードは，例えば日本（Giappone）であれば「GIA」，中国であれば「CIN」，イランであれば「IRA」といったもの。その図書が扱っている国・地域別のコードが，最初の階層に付与される。続いて，サブジェクトコードが付与される。歴史は「IV」，文学は「VI」といった要領。サブジェクトコードは全エリアコードに共通のものである。したがって，日本の歴史であれば「GIA/IV」，イランの歴史であれば「IRA/IV」となる。例えば「通貨研究」というような，日本ではそれほど扱われないが中東地域の歴史研究ではメジャーなテーマにも，独立したサブジェクトコードが与えられている。

配架は，請求記号が示すように地域別・分野別の順だが，芸術分野の図書だけは全地域のものがまとめて別置されている。

2.4　資料・情報の入手

日本資料は，オランダの代理店を通じて購入する。選書は教員・研究者による。なお，学生用の日本語教育教材は，国際交流基金による日本語教材寄贈事業（Japanese-Language Teaching Materials Donation Program）によって維持できているとのこと。

日本語を解するスタッフがいないこともあってか，インターネット経由の情報収集にあっても日本のWebサイト・OPACを利用する機会はほとんどないとのこと。例えば書誌情報の参照によく利用するのは，NDL-OPACやNACSIS Webcatではなく，ケンブリッジ大学日本資料図書館による英国日本語資料総合目録[12]や，米国議会図書館OPAC[13]である。特に後者はローマ字表記による書誌を確認できるので，後述する自館目録作成時のローマ字正誤チェックに有用とのことであった。

2.5　利用

学内の日本語・日本研究の学習・研究者の数は，院生・研究者が約50人，学部学生約500人。

院生・研究者の主な研究分野は，言語・歴史・古典文学・近代文学・芸術・映画等。また，学部1年生の利用はほとんどが西洋言語図書だが，学年があがるにつれて日本語図書を利用するようになる。学生たちに人気の日本のマンガ（イタリア語訳）については，所蔵はない。

学外者の利用も可能で，イタリア国内の各地から教員・研究者・学生らが来館している。

2.6　目録

ナポリ東洋大学の図書館では，SBNの総合目録ネットワークには参加せず，大学独自のOPAC[14]を構築。なおACNPには参加している。

目録用システムとしてSEBINAを使用しているが，CJKやUNICODEへは未対応。日本語資料の書誌レコードは，すべてローマ翻字されたものである。日本語のわかる教員・院生がローマ翻字した書誌を，図書館の目録担当スタッフが入力。さらに件名の付与をイタリア語で行なう。

データベース化開始は1992年で，現在の収録率はほぼ100％。だが，当館ではこれまでに蓄積されてきたカード目録（著者・地域）も，閲覧室にて現役で提供されている。これは，OPAC検索が可能な学内専用端末が不足，かつ，WebOPAC用の一般PCも現在買い揃えられておらず，利用者の利用頻度に追いつかないための措置であるという。

SEBINAでの東洋言語対応が待たれるところだが，実現したとして，図書館スタッフ自身で入力できるわけではない。NACSIS-CATへの参加もまだ先の話，とのことであった。

3．ローマ国立中央図書館東洋コレクション

Collezioni orientali, Biblioteca nazionale centrale di Roma（Vittorio Emanuele II）
http://www.bncrm.librari.beniculturali.it/ita/collezio/coll_spe.htm

3.1　ローマ国立中央図書館

イタリアには国立図書館が7館[15]ある。うち，ローマとフィレンツェ[16]の2館は国立中央図書館として位置づけられ，法定納本図書館に指定されている。イタリア統一を果たしたVittorio Emanuele 2世の名を冠するローマ国立中央図書館[17]は，統一後まもない1876年設立。前身は，イエズス会の学校であるCollegio Romano内の図書館・Bibliotheca Majorであり，コレクションもその古写本・古刊本を引き継いでいる。

蔵書は図書約600万冊，写本約8,000冊，インキュナブラ約2,000冊，16世紀出版物約25,000冊，雑誌約45,000タイトル。人文科学分野が中心。各種コレクションのほか，レファレンスセクション，保存・修復専門セクション等がある。館内の国立マニュスクリプト研究センターでは，イタリア全土の図書館が所蔵しているマニュスクリプトを撮影・マイクロ

フィルム化したものを網羅的に収集しており，その数は10万点を越える。また，国内所蔵の外国図書についての総合目録であるBollettino delle opere moderne straniere（BOMS）の編纂も行なう。

新設された現在の建物に移転したのは1975年。市の中心であるテルミニ駅から地下鉄でひと駅の場所に位置し，年間約50万人以上の利用者が訪れる。2001年には全館リフォームが行なわれている。

3.2 東洋コレクション日本部門

東洋コレクションは当館特殊コレクション群のひとつであり，アラビア・中国・日本・スラブの4部門からなる。

日本部門の蔵書はおおむね江戸・明治期の資料である。現代出版物は若干のレファレンス資料・書誌類以外にはほとんど所蔵していない。カレントな受入・購入もほとんどない。利用者は年間20～30人程度で，ほとんどが古典籍資料を必要とする研究者である。なお，図書館へは18歳以上であれば入館できるが，特殊コレクションの閲覧室に入るには別途の許可を必要とする。

東洋コレクションの現担当者は，中国資料を専門とする方である。

3.3 蔵書

日本部門の蔵書約4,000冊は，ほぼすべて日本語資料である。館内で日本語資料を持つ部署は他になく，また，イタリア語による日本研究資料・翻訳書の類は別に所蔵されている。

蔵書は以下の3種からなる。

(1) 1876～1896年にCarl Valenciani教授（ローマ大学）からの寄贈・譲渡を受け入れたもの
(2) 1915年に約1,400冊を受け入れたもの
(3) 1950年代末にGuido Perris氏のコレクションを受け入れたもの

蔵書は温度湿度管理（15～20℃，40～50％）された書庫に収蔵されている。和装本であっても，書架にすべて縦置きで配架されている。もともと帙入りだったものは帙入りで，帙のなかったものは極力箱詰めされてはいるものの，裸のまま縦置きされている和装本も少なくない。また，Valenciani教授からの寄贈資料には，和装本を洋装に製本したものが多くあった。外見は革等による通常の洋装本であり，中を開くと日本の古写本・古刊本である。また汚損・劣化の進行を防ぐため，ビニールのカバーで覆われている資料もあった。これらはおおむね館内の保存・修復専門セクションからのアドバイスによるとのことである。

書庫のすぐ隣に，これら古典籍資料を撮影するための機器・設備が用意されており，利用者からの求めに応じて撮影・デジタル化・CD-ROM保存等が行なわれる。

請求記号は，「73」+「サイズ別記号」+「連番」。1階層目の「73」は，旧図書館時代に日本語資料が収蔵されていた部屋の番号がそのまま残っているというもの。2階層目は縦サイズ別の記号で，16 cm以下は「A」，16 cmから28 cmは「B」というように，4段階のアルファベットが付与される。

3.4 目録

当部門の書誌書目の類は，以下の2点。

「Catalogo dei libri giapponesi dei periodi Edo e Meiji＝江戸明治期刊行日本語図書目録」[18]

「Pagine dall'Oriente：libri cinesi e giapponesi della Biblioteca nazionale＝漢和書精選」[19]

「Catalogo dei libri giapponesi dei periodi Edo e Meiji」は，図書館情報大学（当時）の藤野幸雄氏が国際交流基金の援助により，それまで未整理だった蔵書の目録を作成したもの。現在のところ当部門の日本語資料についてもっとも整備された目録として利用・提供されている。

なお，全館の目録データベースはSBN総合目録に参加。当部門のレファレンス資料がローマ翻字の上収録されている。

4．国際交流基金ローマ日本文化会館図書館

La Biblioteca dell'Istituto Giapponese di Cultura in Roma, Japan Foundation
http://www.jfroma.it/jap/biblioteca/index.html

4.1 ローマ日本文化会館とその図書館

ローマ日本文化会館[20]は，1954年の日伊文化協定に基づき，1962年，海外初の日本文化会館として開館した。当初は民間法人国際文化振興会の運営。1972年，国際交流基金（外務省所管特殊法人（当時））[21]の運営となった。イタリアにおける日本文化理解の促進を目的とし，文化事業（展覧会・映画会・講演会等の催し物）・日本語教育関連事業・日本研究奨励・交流・広報・調査等の活動を行なっている。館内には展覧会を行なうことのできるロビーや，講義室，約200人収容のホール等がある。

図書館の設置と運営も，当会館の重要な活動のひとつである。スタッフは3人（うち1人は半日勤務）で，日本語・イタリア語ともに精通しており，2人は日本研究情報専門家研修[22]の修了者である。

4.2　蔵書・配架と施設

蔵書数は，図書約32,000冊。うち，日本語約19,500冊，西洋言語約12,500冊。なお，イタリア語による日本関係図書はそもそも点数が多くないため，西洋言語図書の約7割が英語であり，イタリア語は2割強程度とのこと。雑誌は約500タイトルを所蔵。

年間受入図書冊数は約600～700冊程度。寄贈の割合が少なくなく，3～4割から半数を超えることもある。カレント雑誌は約200タイトルで，和洋ほぼ同数。主な購読誌は，国文学解釈と鑑賞，キネマ旬報，美術手帖，AERA，中央公論，文藝春秋等。新聞は，朝日，日経，読売，Japan Times。

年間資料購入額は計約350万円。内訳は，図書購入が和書で約100万円。別途洋書（現地購入の西洋言語図書）で約100万円。また，国際交流基金本部での年間雑誌購読送付額が約100万円だが，そのうちの約半額程度を送料が占めている。加えて，現地購読の洋雑誌が年間約50万円。

他に，博士論文マイクロ資料約2,900点，ビデオ資料約250本のほか，日本語学習用カセットテープ約1,400本，音楽CD等。ビデオ資料は主にドキュメンタリーや日本語教材の類。日本映画へのリクエストは多いとのことで，貸出可能なビデオ・DVDを増やしていくことについては今後の課題のようである。また，契約データベースに，Bibliography of Asian Studies Online[23] 等がある。

主要分野は人文科学・社会科学。特に日本文学のイタリア語訳，日本文学・作家全集，歴史・宗教分野の史料，レファレンス資料等。若い利用者の関心が，よりコンテンポラリーな日本文化に移ってきているため，最新の資料と情報を蔵書構成にも迅速に反映させていくことが課題のひとつ，とのことである。

分類には和洋ともNDC（新訂8版）を使用。かつて洋書にUDCを採用していたが，17～18年前にNDCに統一された。洋書であっても日本関係図書であるためNDCのほうが都合がよく，また両者とも同じ分類体系を採用したほうが便利であったためとのこと。

館内には，マイクロ資料閲覧のためのマイクロフィルムリーダー（デジタル変換機能付き）や，オーディオ機器，BDS等がある。地階書庫には，バックナンバー雑誌，古い年代の図書，展覧会図録のコレクション等。閲覧室のカレント雑誌は，一般誌と学術誌が別に配架されているが，学術誌のほうでは寄贈のものと思われる大学・研究機関の紀要・研究誌類，美術館・博物館・各種協会のニュースレター類が豊富に並んでいる。

4.3　資料・情報の入手

和書購入は国際交流基金を通じ，年1回サイクルで行なわれる。年1回のタイミングが合わないために，全集ものや年鑑類が入手困難になってしまうケースもあるという。ネット古書店などを利用して欠本を補充することを今後検討したいとのこと。

イタリア語以外の西洋言語資料はAnglo American Book[24] 等の国際書店による。

選書は図書館スタッフが新刊カタログ・書評等を参考に選書。イタリア語で書かれた日本関係図書は優先的に収集，アジア・日本研究学術雑誌の書評に取り上げられた日本研究資料はできるだけ網羅的に収集するようにしているとのことである。

4.4　利用

当館の年間入館者数は約5,500～6,000人で，うち約2割が日本人。貸出冊数は年間約3,000冊前後で，うち約7～8割が洋書である。

イタリア人利用者の多くは日本専攻の学生・研究者で，ローマ・ラ・サピエンツァ大学をはじめイタリア国内各地から利用がある。学生の利用分野は人文科学だけに限られない。特に最近の社会科学分野では，日本経済から社会学のほうへ関心が移ってきているとのこと。

当館では，入館・閲覧は無料であるが，貸出には利用者登録が必要。登録は15歳以上で，10ユーロの年会費その他を必要とする。登録者数は現在約5,000人。

また，イタリア国内の地方在住者のために，郵送による貸出サービスを行なっている。メールまたはFAXで申し込み，送料は利用者負担。郵送による複写サービスも受け付けており，館内資料はA4用紙1枚0.10ユーロ。日本の国際交流基金図書館から所蔵雑誌記事の複写を取り寄せることも可能で，A4用紙1枚0.20ユーロ。

4.5　レファレンス

当館は，イタリアにおける日本資料・日本情報の拠点として，数多くのレファレンスを受け付けている。電話・FAX等総じて年間約1,000件。e-mailだけでも月30件前後の問い合わせがあるという。レファレンス内容の事例としては，留学情報，企業情報，出版社・美術館・博物館情報，DVD等の資料入手方法，通訳・翻訳者・有識者の照会，日本語講座・日本文化講座情報等。ただ，人物照会を受けてもプライバシー保護の観点からどこまで応えてよい

か判断が難しい，また所蔵している美術品の落款やくずし字の読み方など，特殊な分野に関する質問もあり，スムーズには応えられない等，困難も多いとのこと。

またレファレンスの一環として，「書誌作成サービス」を行なっている。これは，利用者の求めるテーマに沿った図書・文献の書誌を作成・提供するというもの。卒業論文等のための学生からの依頼が多い。国内各地からe-mail等で受け付けている。

さらに，「日本研究イタリア語雑誌記事索引」として，当館所蔵の日本・アジア研究イタリア語雑誌に収録されている日本関係論文について，自館でデータベースを作成している。（館内利用のみ）

4.6 目録

4th Dimensionを用いた独自の目録データベースとWebOPAC[25]を構築。SBNには参加していない。

4th Dimensionは，目録システム構築当初，国際交流基金の図書館全体がMacintoshを使用していたころに採用されたもの。その後Windowsへの乗り換えの際にデータ変換が思うように行なわれず，実際に変換が終了しWebOPACの構築が実現したのは2005年。現在のWebOPACでは，日本語表示・検索ともに実現できている。

書誌レコードは日本語とローマ字の両方で作成。収録率はほぼ100％であるが，図書のみ。雑誌については，冊子体目録及びホームページ上のリストで確認できる。

NACSIS-CATへの参加については，自館OPACが完成したばかりでもあり，現時点では考えていないとのこと。現在イタリアの他の図書館では日本語資料をローマ字で表記しているが，近い将来，日本語でのオンライン目録の実現に向けてNACSIS-CATも選択肢に入ってくると思われる。その際には，イタリア日本資料総合目録構築の可能性も含め改めて検討したい，とのことであった。

5．ローマ・ラ・サピエンツァ大学文学部東洋学科図書館（ローマ）

Biblioteca del Dipartimento di Studi Orientali, Università degli Studi di Roma “La Sapienza”
http://w3.uniroma1.it/deptorient/biblioteca.htm

5.1 ローマ・ラ・サピエンツァ大学

1303年，Boniface 8世により法王の学校として設立されたのが，ローマ・ラ・サピエンツァ大学[26]の前身である。19世紀後半に現在のような大学としてのかたちをとり，1935年に現在の場所に移転した。21の学部を持ち，教員数約4,000人，学生数約19,000人[27]。ローマ国立中央図書館蔵のコレクション所有者であったValenciani教授は，19世紀後半に当学で日本研究を始めた人でもある。

なお“sapienza”は「叡智」の意である。

5.2 東洋学科図書館

東洋学科図書館は，創立1905年。現在は文学部東洋学科の一角にある。

東洋学科の棟に入ると，入り口から図書室へと続く細い廊下の両側に，天井の高さまで達する事務用書類ケースが壁一面ほぼすきまなく並べられているのが見える。閲覧室内に収められているのは雑誌・レファレンス資料の類のみで，一般の図書はおおむねこの廊下の書類ケースか，別室の小部屋，研究室，事務室の壁面を間借りするかたちで配架されている。廊下の書類ケースは施錠されているが，扉はガラス張り。利用者はガラス越しに必要な図書をブラウジングすることが可能で，求めに応じて図書館スタッフがその都度開錠，資料を提供する。このように，狭隘化が当面の問題点である。

図書館スタッフ5人の中に日本分野の専門家はいない。が，当学科の学生数名がアルバイトとして雇われており，日本語を理解できる学生も含まれていた。

5.3 蔵書と配架

全蔵書冊数は，図書約125,000冊，雑誌約700タイトル。分野は人文科学中心で，地域としては東アジアから中近東・アフリカまでをカバーしている。

日本資料は約4,500冊で，うち日本語資料が約半数。カレント雑誌は7タイトル，うち日本語が2タイトル。年間資料購入額は約6,000ユーロ。

蔵書は，教員の研究領域からか，特に文学分野が中心。年代もやや古い基本的な図書がそろえられている。なお，日本語の語学教材は図書館の所蔵資料とは別個の取り扱いとなっているとのこと。また，漢籍は所有しているようだが，日本の古典籍資料はない。

閲覧室内には手動式集密書架が設置されており，雑誌・レファレンス資料・書誌類が配架されている。一般の図書は前述の通り，廊下・事務室・研究室等に準開架式で配架。配架はおおむね地域・言語別ではあるが，美術・芸術分野の図書は全地域分をまとめて別置している。

分類・請求記号には，「エリア」＋「配置場所」＋「連番」の順による独自の体系を使用している。1階層目には，その資料が取り扱っている地

域・言語をあらわす記号が用いられる。日本であれば「Giapp」等。この地域名に加えて，例えば文学テキストであれば「T」等の記号が付与される。日本文学作品テキストであれば「T.Giapp」となる。２階層目に，研究室であれば「９」，図書館配置であれば「８」等の番号が付与され，その資料がどこに配置されているかが示される。

5.4　資料・情報の入手

日本語資料は，Libreria Orientalia[28] というイタリアの書店を通して購入する。選書は教員による。

ILLはナポリ・ヴェネツィアのほかヨーロッパ全土へ依頼している。日本へもILL依頼を行ないたいものの，その方法やコストが明確にわからない，とのコメントがあった。

5.5　利用

教員の研究分野は，日本文学およびその翻訳が主である。また，日本語を学ぶ学部学生は約350人。１年次が最も多いが，日本語学習はやはり難しいらしく，２年次，３年次と学年を追うごとに減っていくという。学生の人数に比して，日本資料はナポリ・ヴェネツィアほどそろっているとは言いがたい。そのためもあってか，学生たちは同じローマ市内のローマ日本文化会館図書館を頻繁に利用しに行くとのことであった。

なお，当館自体は学外者の利用も可能。

5.6　目録

全学目録データベースとしてSBN・ACNPに参加しており，OPAC[29] はSBN。目録システムはSEBINAを使用。CJKやUNICODEには対応しておらず，日本語のわかる教員が翻訳・ローマ翻字した書誌事項等を，目録担当スタッフが入力。

目録のデータベース化は1998年からで，蔵書約125,000冊中約6,500冊が登録されている。なお，カード目録も現役で作成・更新を続けているとのこと。

６．ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学外国語・外国文学部東アジア学科図書館（ヴェネツィア）

Biblioteca del Dipartimento di Studi sull'Asia Orientale, Università “Ca' Foscari” Venezia
http://venus.unive.it/dsao/webpages/bibliodsao.html

6.1　ヴェネツィアとヴェネツィア・カ・フォスカリ大学

ヴェネツィアはイタリア北東部に位置し，ローマからは鉄道で約５時間の距離。共和制都市国家として，イタリア統一まで1000年以上の歴史を持っていた土地である。ヴェネツィア本島は，四方を海に囲まれたラグーナ（潟）の上にあり，街なかを運河が縦横に走る。このため，大潮や気圧変化のために高潮が発生し，街なかが数十cm近く水没することもしばしばである。ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学はこのヴェネツィア本島内にある。

ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学[30] の歴史は1868年創立のScuola Superiore di Commercioに遡る。15世紀にヴェネツィアの総督であったFrancesco Foscariの邸宅に居を構えており，“Ca' Foscari”の名で知られる。創立当初は商業・経済専門の高等教育機関であった。現在は経済，文学・哲学，外国語・外国文学，自然科学の４学部。中国・日本・韓国分野からなる東アジア学科は，外国語・外国文学部に属する。教員数は全学で約500人。学生数約17,000人[31]。

1868年の創立後まもなく，1873年には最初の日本語講座が開始されている。戦後，1965年には日本研究所が設立され，日本語・日本文学科としての独立した図書室も設けられていたが，2002年，中国・日本・韓国の各学科が統合。東アジア学科として現在の建物に移転したのを機に，図書館も中国・日本・韓国で統合されている。

日本語を学ぶ学部学生の数も多く，日本の大学への短期研修，インターネットを介しての日本の大学との共同講義，日本古典文学の翻訳活動等，教育・研究活動が盛んに行なわれている。

6.2　東アジア学科とその図書館施設

前述のように，東アジア学科は2002年の統合を機に，現在の建物に移転している。大学本部や他の学科等とは離れた場所にあり，数百年前に富豪によって建てられたという建物を賃借で使用している。

学科全体の入口は建物の１階（日本で言う２階）にあり，そこにBDSが設置されている。これは，東アジア学科内に図書室としての独立した部屋がなく，学科内全体に書架が散在しているためである。学生用閲覧室には頻用される文学・歴史分野図書やレファレンス資料，講師室には宗教・哲学分野図書，カンファレンスルームにカレント雑誌，廊下に全集もの，といった具合である。

ヴェネツィアは海に囲まれているため土地に限りがあり，また1000年の歴史を持つこともあって，

新しい建物を建てるような余地が少ない。このため，前述のように数百年レベルの古い建物を使用することになるが，床強度が充分ではなく，１階（日本で言う２階）以上のフロアに図書・書架を集中配置することができない。また，これも前述のように高潮の被害があるため，地下に書庫を設けることもできない。実際，訪問日の数日前にも高潮が発生し，この建物の入り口付近もある程度の高さまで浸水していたと言う。また，地面から数十cmほどの高さの地階（日本で言う１階）にバックナンバー雑誌を収めた手動式集密書架の書庫があるが，ここも湿気によるカビの被害に悩まされており，エアコンの常時運転によって湿度管理を行なっている状態である。

以上のような理由から，バックナンバー雑誌以外の蔵書は学科建物全体（主に床強度が比較的強い壁際）に分散して配架されている。したがって運用上，その図書が例えば学生用学習席のある部屋に配架されていれば“開架”となり，教員の研究室内に配架されていれば“閉架”となる。分野や年代を考慮し，よく使われる図書ができるだけ“開架”となるよう工夫しつつ配架されている。そもそもこの建物は，次の新しい建物が決まるまでの数年程度の仮住まいの予定であった。その計画が中断してしまっており，現在，建物内の随所にスペースを捻出して，書架を配置しているとのことである。

図書館スタッフは２人。日本語を解するスタッフはいないが，当科の日本文学講師が日本研究情報専門家研修を修了している。

6.3　蔵書と配架

当館の日本資料は，図書が約11,000冊（日本語約4,700冊，西洋言語約6,300冊），雑誌が約120タイトル（日本語約40タイトル，西洋言語約80タイトル）。なお，学科全体での所蔵図書冊数は約75,000冊である。

年間受入図書冊数が約600冊，カレント雑誌約70タイトル。年間資料購入額は約10,000ユーロ。

蔵書の主要分野は文学・言語・歴史。当館以外にも，経済分野・芸術分野等の日本資料が他部局に所蔵されてはいるが，ほぼ西洋言語のみであり，冊数もそう多くはないとのこと。古典籍資料の蔵書はないが，戦前出版物が日本語・西洋言語とも少なからず所蔵されており，当地における日本研究の歴史的厚みの一端を知ることができる。

分類・請求記号は「分野別記号等のアルファベット＋連番」。全集・シリーズごとに，仮名草子集成には「KS」，宮本百合子全集なら「MIYA」，講談社学術文庫は「KGB」等のアルファベット記号が付与される。中国・韓国のコレクションとは別の，日本資料だけの独自の体系である。これは，統合以前の独立した図書室があったころの名残と思われる。統合に合わせて全体をDDCに統一させたいが，書架が散在している現状ではそれも叶わない，とのこと。

6.4　資料・情報の入手

選書は，教員に書籍カタログを渡し，リクエストを募り，選書委員会で決定する。資料購入には日本出版貿易株式会社[32]やAmazonを利用。

よく使われる日本のWebサイトとして，早稲田大学図書館OPAC[33]が挙げられた。

6.5　利用

現在この東アジア学科には，日本分野の教員（研究者）が８人，学部学生が約500人属している。外国語・外国文学部ではあるが，社会学等，語学・文学以外の分野の資料も求められる。また，雑誌よりも図書，日本語資料よりも西洋言語資料の利用のほうが多い。

外部からの利用者もあり，日本の建築・美術・マンガについて興味ある人が訪れるとのこと。

6.6　目録

ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学の図書館では，SBN総合目録に参加せず，大学独自のOPAC[34]を構築している。CJKやUNICODEへの対応はされておらず，その予定もない。日本語資料の書誌レコードは，タイトル等の書誌事項をローマ翻字したものが作成されている。

日本語を理解するスタッフが当館にはいないため，教員がローマ翻字したものを図書館スタッフが入力。長母音の取り扱いが難しいとのこと。

遡及入力は，一部の例外を除いてほぼ終了。カード目録は1994年で停止している。

日本資料の蔵書数ではイタリア国内でも有数ではあるが，現在のところ，NACSIS-CAT参加の予定はないとのこと。その有用性は認識されているものの，コスト・人員の問題から未参加である。

７．まとめ

今回の訪問で各館の司書・教員の皆さんより，日本の図書館サービスや情報発信について，さまざまなコメント・リクエストをいただいた。さらに，各館の調査・訪問に加えて，ローマ・ラ・サピエンツァ大学文学部東洋学科図書館のMirella Piperno氏，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学外国語・外国文

学部東アジア学科のLaura Moretti講師のご協力のもと，実際に日本語や日本の文化・社会について学んでおられる学生の皆さんのお話をうかがう機会を得た。それに基づき，私見ではあるが，日本からの主に海外に向けての図書館サービスや情報発信についてどのような改善がなされるべきかを考え，まとめにかえたい。

・書誌・目録データベースにおけるローマ字併記の整備

学生や図書館スタッフに，学習・研究・業務にあたってよく使う日本のWebサイト・情報サービスは何かを尋ねたところ，「早稲田大学図書館のOPAC」を挙げた人が多かった。その一方で，NACSIS WebCATの存在は学生にあまり知られていないようであった。その理由は，インタフェースだけでなく，書誌・所蔵データの表示にも英語・ローマ字が使用されていることにあるようである。実際に早稲田大学図書館OPACで日本語資料を検索し書誌を表示させてみると，タイトル・出版事項・責任表示・件名等にカナ及びローマ字でヨミが併記されている。日本語初学者や日本語を解さない図書館スタッフには，こちらのほうが確かに有用であろう[35]。同じくローマ字表記が確認できるという理由から，日本のWebサイトではなく米国議会図書館OPACを有用ツールとして挙げる人もいた。

だが，日本語資料がより網羅的に収録されているという点では，NDL-OPACやNACSIS Webcatのほうがはるかに充実しているはずである。これらの書誌データにカナとローマ字が併記されれば，格段に有用な書誌データベースとなるにちがいない。

今回訪問したイタリアの日本資料図書館では，そのほとんどが日本語書誌をローマ翻字しており，そのことによる教員やスタッフへの負荷，整理の滞り等が懸念される。また，実際に各OPACで日本語資料の書誌を検索してみると，ローマ字の誤りも少なからず見られる。イタリア国内でも蔵書数が多く，日本語学習者・研究者も多い大学の図書館にしてこのような現状であるならば，さらに規模の小さいその他の大学の図書館にあっては，その困難のほどは容易に推し量られる。かつ，イタリア以外の国においても同じことが言える。

日本語学習者・研究者であれば日本語が理解できるはず，と言えるかもしれない。が，図書館備付けまたは個人用のコンピュータにおいて日本語の表示・入力が必ずしもスムーズにはいかないであろうこと，日本に関する資料・情報を必要とするのは語学に長けた人文系研究者・学生に限らないこと，海外における日本理解が大多数の日本語初学者によって支えられていくであろうことを思えば，ローマ字併記は決して無駄ではないはずである。

日本の代表的な書誌・目録データベースサービスであるNDL-OPACやNACSIS Webcatでのローマ字併記は，日本語資料についての書誌情報の国際的な流通，及び日本情報の海外発信という意味で，重要な方策ではないだろうか[36]。

・ILL受付体制の整備・アナウンスの強化

学生・研究者に，図書館に所蔵されていない日本語の図書や論文コピーをどのように入手しているかについて尋ねたところ，回答はおおむね以下のようなものであった。「ローマ日本文化会館図書館を利用する」「Amazonで買う」「日本にいる友人・知人にFAXや郵送で送ってもらう」「実際に日本へ行って資料を集める」。日本へのILL依頼については，使ったことがない，使ったとしても送料が高い，時間がかかる，との回答しか得られなかった。

図書館スタッフにも日本へのILL依頼は評判が芳しくない。Web上のデータベースの充実によって書誌・所蔵は比較的容易にわかるようになったものの，その入手方法及びその説明についてはさほど改善されていない。依頼方法がわからない，コストやかかる時間がわからない，支払・取引方法がわからないか支障がある等。また，国立国会図書館のWeb受付による郵送複写サービスについても，海外の利用者にとって朗報ではあるものの，図書館側での支払方法が確立できないために，求める利用者本人に直接自力で登録・申込してもらうよう案内している現状にある，という館もあった。

前稿[37]でも述べたことではあるが，海外からのILL依頼について，判りやすくオープンな説明がなされていること，オフィシャルかつシステマチックな方法による依頼でなくても受け付けることができるような柔軟さを持つこと等が望まれる。

謝辞

今回の訪問を快くご承諾下さり，多くのことをご教示下さった各館の皆様－Antonella Peirceさん（ナポリ東洋大学），Marina Battaglinisさん（ローマ国立中央図書館），加治以久子さん，Sergio Leviさん（ローマ日本文化会館），Mirella Piperno さん（ローマ・ラ・サピエンツァ大学），Laura Moretti先生（ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学）－に心より御礼申し上げます。

注

1）江上敏哲．欧州の日本資料図書館における活動・実態調査報告：日本資料・情報の管理・提供・入手．大学図書館研究．73, 2005, p. 45-56.

2）1995年, Istituto Italo-Africano（IIA）と統合して Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente（available from <http://www.isiao.it/>,（accessed 2006-03-26).）となった。

3）Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi.（online), available from <http://venus.unive.it/aistug/>,（accessed 2006-03-26).

4）国際交流基金．"日本語教育国別情報：2004年度：イタリア"．国際交流基金．（オンライン），入手先 <http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/italy.html>,（参照2006-03-26)．他

5）ナポリ東洋大学，ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学，ローマ・ラ・サピエンツァ大学，フィレンツェ大学，トリノ大学。

6）Servizio Bibliotecario Nazionale.（online), available from <http://www.sbn.it/>,（accessed 2006-03-26).

7）Istituto Centrale per il Catalogo Unico delle Biblioteche Italiane e per le Informazioni Bibliografiche.（online), available from <http://www.iccu.sbn.it/>,（accessed 2006-03-26). 1951年設立。

8）Archivio Collettivo Nazionale dei Periodici .（online), available from <http://www.cib.unibo.it/acnp/>,（accessed 2006-03-26).

9）Centro Inter-Bibliotecario.（online), available from <http://www.cib.unibo.it/>,（accessed 2006-03-26).

10）Kaji, Ikuko. Situation of Japanese studies libraries in Italy. EAJRS Newsletter. 13, 2005, p.20-21.

11）Università degli Studi di Napoli "L' Orientale".（online), available from <http://www.iuo.it/>,（accessed 2006-03-26).

12）Japanese Union Catalogue.（online), available from <http://juc.lib.cam.ac.uk/>,（accessed 2006-03-26).

13）Library of Congress Online Catalogs.（online), available from <http://catalog.loc.gov/>,（accessed 2006-03-26).

14）available from <http://opac.iuo.it/>,（accessed 2006-03-26).

15）ローマ，フィレンツェ，ナポリ，ミラノ，ヴェネツィア，トリノ，パレルモ。

16）Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze.（online), available from <http://www.bncf.firenze.sbn.it/>,（accessed 2006-03-26).

17）Biblioteca nazionale centrale di Roma.（online), available from <http://www.bncrm.librari.beniculturali.it/>,（accessed 2006-03-26).

18）Fujino, Yukio. Catalogo dei libri giapponesi dei periodi Edo e Meiji＝江戸明治期刊行日本語図書目録. Roma, Biblioteca nazionale centrale Vittorio Emanuele II, 1995, 140p.

19）Biblioteca nazionale centrale Vittorio Emanuele II. Pagine dall'Oriente：libri cinesi e giapponesi della Biblioteca nazionale＝漢和書精選. Roma, Bardi, 1996, 141p.

20）Istituto Giapponese di Cultura in Roma.（online), available from <http://www.jfroma.it/>,（accessed 2006-03-26).

21）国際交流基金（入手先 <http://www.jpf.go.jp/>,（参照 2006-03-26).）は「国際文化交流事業を総合的かつ効率的に行うことにより，我が国に対する諸外国の理解を深め，国際相互理解を増進し，及び文化その他の分野において世界に貢献し，もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的とする」（独立行政法人国際交流基金法第3条）。文化芸術交流，海外における日本語教育，日本研究・知的交流を主要事業とする。2003年10月より独立行政法人。

22）海外の日本研究司書等を対象に日本で行なわれたもので，国際交流基金・国際文化会館・国立国会図書館・国立情報学研究所等による。前身は日本研究司書研修。以下の文献等を参照。
樋口恵子．「日本研究情報専門家研修」事業について．大学図書館研究．74，2005，p.28-34.

23）1971年以降の欧米学術雑誌のアジア関係論文データベース。Bibliography of Asian Studies Online.（online), available from <http://www.aasianst.org/bassub.htm>,（accessed 2006-03-26).

24）Anglo American Book.（online), available from <http://www.aab.it/>,（accessed 2006-03-26).

25）available from <http://www.jfroma.it/O.P.A.C.htm>,（accessed 2006-03-26).

26）Università degli Studi di Roma "La Sapienza".（online), available from <http://www.uniroma1.it/>,（accessed 2006-03-26).

27）The Europe world of learning. 56th ed.（2006). London；New York, Routledge, 2005, 2 v.（ISBN 1857433440, 1857433459)

28）Libreria Orientalia.（online), available from

<http://www.orientalialibri.it/>,（accessed 2006-03-26）.

29）available from <http://opac.uniroma1.it/>,（accessed 2006-03-26）.

30）Università “Ca’ Foscari” Venezia.（online）, available from <http://www.unive.it/>,（accessed 2006-03-26）.

31）前掲27）

32）日本出版貿易株式会社.（オンライン），入手先 <http://www.jptco.co.jp/>,（参照 2006-03-26）.

33）入手先 <http://wine.wul.waseda.ac.jp/>,（参照 2006-03-26）.

34）available from <http://www.unive.it/nqcontent.cfm?a_id=3292>,（accessed 2006-03-26）.

35）他に，慶應義塾大学のOPAC（available from <http://catalog.lib.keio.ac.jp/>,（参照 2006-03-26）.）では，タグ形式表示モードに限り，ローマ字表記が確認できる。

36）Webcat Plusにおけるローマ字検索等の有効性について，以下の文献に詳細な検証がある。
森本英之．NII Webcat Plusの北アメリカ地域での有用性：検索及び基盤となる書誌レコードの観点より．大学図書館研究．74，2005，p.19-27.

37）前掲1）

参考文献

［イタリアの日本研究・図書館］

Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi.（online）, available from <http://venus.unive.it/aistug/>,（accessed 2006-03-26）.

Servizio Bibliotecario Nazionale.（online）, available from <http://www.sbn.it/>,（accessed 2006-03-26）.

Archivio Collettivo Nazionale dei Periodici.（online）, available from <http://www.cib.unibo.it/acnp/>,（accessed 2006-03-26）.

ニョーリ，ゲラルド．イタリアの日本研究：中亜極東協会の役割．日伊文化研究．31，1993，p.89-99.

マライーニ，フォスコ．イタリアの日本研究．日本研究（国際日本文化研究センター）．10，1994，p.113-120.

奥山裕之．イタリアにおける図書館ネットワークの構築．カレントアウェアネス．No.177，1994.

加治以久子．イタリアにおける日本研究文献所蔵図書館の現状：日本関係情報の現状（8）．カレントアウェアネス．No.227，1998.

宍道　勉．イタリアの図書館考：概論．鳥取短期大学研究紀要．43，2001，p.13-26.

Tollini, Aldo. イタリアにおける日本語教育の始まりと現状．國語研究（國学院大学國語研究会）．67，2003，p.17-19.

国際交流基金．“日本語教育国別情報：2004年度：イタリア”．国際交流基金．（オンライン），入手先 <http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/italy.html>,（参照2006-03-26）

Kaji, Ikuko. Situation of Japanese studies libraries in Italy. EAJRS Newsletter. 13, 2005, p.20-21.

［ナポリ東洋大学アジア研究学科図書館］

Università degli Studi di Napoli “L’ Orientale”.（online）, available from <http://www.iuo.it/>,（accessed 2006-03-26）.

［ローマ国立中央図書館東洋コレクション］

Biblioteca nazionale centrale di Roma.（online）, available from <http://www.bncrm.librari.beniculturali.it/>,（accessed 2006-03-26）.

Fujino, Yukio. Catalogo dei libri giapponesi dei periodi Edo e Meiji＝江戸明治期刊行日本語図書目録. Roma, Biblioteca nazionale centrale Vittorio Emanuele Ⅱ, 1995, 140p.

Biblioteca nazionale centrale Vittorio Emanuele Ⅱ. Pagine dall’Oriente：libri cinesi e giapponesi della Biblioteca nazionale＝漢和書精選. Roma, Bardi, 1996, 141p.

［国際交流基金ローマ日本文化会館図書館］

国際交流基金.（オンライン），入手先 <http://www.jpf.go.jp/>,（参照 2006-03-26）.

Istituto Giapponese di Cultura. Giornali e periodici disponibili in biblioteca.［Roma］, Istituto Giapponese di Cultura,［2000］.

Levi, Sergio.“ローマ日本文化会館図書館（イタリア）”．海外の日本研究図書館とその協力活動．国際文化会館図書室編．東京，国際交流基金，2001，p.68-70.（ISBN 4875400446）

Kaji, Ikuko. Situation of Japanese studies libraries in Italy. EAJRS Newsletter. 13, 2005, p.20-21.

［ローマ・ラ・サピエンツァ大学文学部東洋学科図書館］

Università degli Studi di Roma “La Sapienza”.（online）, available from <http://www.uniroma1.it/>,（accessed 2006-03-26）.

［ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学外国語・外国文学部東アジア学科図書館］

Università “Ca’ Foscari” Venezia.（online）, avail-

able from <http://www.unive.it/>,（accessed 2006-03-26）.

Boscaro, Adriana. The Institute of Japanese Studies in Venice. IIAS newsletter. 6, 1995, p.52.

＜2006.3.31受理 えがみ　としのり　京都大学情報学研究科図書室＞

EGAMI Toshinori

The Report on Japanese Resource Libraries in Italy

Abstract: In December 2005, the author visited Italian Japanese resource libraries in Napoli, Rome, and Venice, and surveyed their collections, operations, and activities and how they select, acquire and catalog Japanese language materials. While the number of Japanese language learners appears to be on the increase in Italy, there are very few libraries with large Japanese collections. Most libraries are operated as a combined East Asian or Oriental collections and there are very few staff who can understand Japanese. The author offers a number of examples of how improved services from Japan, such as including Romanization in cataloging records or providing more information about getting interlibrary loan, can help Italian Japanese resource libraries to serve their clientele better.

Keywords: Japanese Resource Libraries / Japanese Studies in Italy / Biblioteca del Dipartimento di Studi Asiatici, Università degli Studi di Napoli “L’Orientale” / Collezioni orientali, Biblioteca nazionale centrale di Roma（Vittorio Emanuele Ⅱ）/ La Biblioteca dell’Istituto Giapponese di Cultura in Roma, Japan Foundation / Biblioteca del Dipartimento di Studi Orientali, Università degli Studi di Roma “La Sapienza” / Biblioteca del Dipartimento di Studi sull’Asia Orientale, Università “Ca’ Foscari” Venezia